
ドラゴンクエスト? 空と海と大地と呪われし姫君

夢島

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエスト？ 空と海と大地と呪われし姫君

【Nコード】

N3099L

【作者名】

夢島

【あらすじ】

ゲームの世界を冒険する主人公最強系RPGファンタジー。

仲間とともに世界の果てまで冒険、

主人公の最強特殊能力の正体とは？

原作まんまに近いですが、恋愛など、新たな設定も加えてどんどん

更新していききたいと思います！

プロローグ（前書き）

おはこんばんにちわ〜〜ww

文才のかけらもないわたくしが

小説を書いちゃいますwww

といっても原作丸写しといってもいいような気がしますわ

それでも設定は少し変えてあります！

原作レイプかもしれませんが

よろしくお願いします！

プロローグ

その日。

風が鳥たちにささやきました。

水は魚たちに、そつと。

大地もまた、小さな獣たちに伝えました。

大きな、それは立派なお城が、一夜のうちに滅んでしまったと。恐ろしい呪いが、あつと言う間にそこに住む人間たちを包み込み、目覚めることのない眠りへと縛りつけてしまったのだと。

うわさは、もの言わぬ獣たちのあいだに、波のように広がって。

大空をかける二羽の鷹が、ついに目にします。呪いをかけて去った悪しき道化師を追って、旅を続ける若者の姿を。

そう。大切な人たちとお城を救うことができるのは、この若者とその仲間たちだけなのです。

行く手にあるのは、見渡す限りどこまでも広がる世界。その先には、見たこともない町、謎に満ちたダンジョン、そして、想像を超える不思議な魔物たちが待っています。しかし、道を切り開く力は、このパーティに眠っている。

第1話 旅立ち

「おい、兄貴〜！！　こんなところで油を売つてるとすぐに日が暮れちまうでげす。　はやいとこ町にいきましょうや！　アッシはパ〜ッと飲みあかしたい気分がすよ」

「はいはい、わかったよ」

「兄貴は若いんでげすからさくさくいきましょつや」

「そついうがヤンガス、お前はいくつなんだ！　どう見ても50代にしか見えないぞ！」

丸々と太った体にトゲトゲの帽子？のようなものを身につけ、頬には十字の傷、背中には棍棒を背負い胸毛を見せているこのワイルドなおっさんを見て言う。

「えへへ、山賊を長くやってたもんで年なんて忘れちゃいました」

「そつかいそつかい」

それにしてもここはいい場所だった。

周りは木々に囲まれており、ゆるやかに曲がった川が流れ、空気はおいしく、いつまでもここにいたい気分だった。

そんな緑の多いこの場所に、もう一つ緑があった。

「ホント何度も言うようだがすが兄貴がこのおかしなおっさんの家来なんてねえ。　まっ、アッシにしたって兄貴の子分になったわけ

ですがから人のことは言えんですが…」

そう隣の緑の物体？を見て言う。

ヤンガスの隣には緑の魔物のような生き物がいた。

まあ、人に見えなくもないが体が緑であることから人間からは少し、いやかなり遠く見えた。

「誰がおかしなおっさんじゃ！？ まあよいわ！ 下賤の者にはわしの気高さなど到底わからぬことじゃな。」

下賤じゃなくてもわからないだろう…

緑の魔物と凶悪なおっさんのいがみ合いがしばらく続いたところで、

「そんなことよりエイト、姫はどうした？ 姫の姿が見えぬようじやが…」

「そういえばいないな…」

「わしの可愛いひとり娘のミーティア姫は無事か！？」

あたりを見渡すと向こうから綺麗な白馬が寄ってきた。

「おお、おったか。 姫！ミーティア姫！」

そう言って馬へかけよっていく緑のおっさん。

そのおっさんの名前はトロデ。

一国の王だったらしいが、今の姿ではそんな面影などない。

「さて、馬姫さまもおもどりだし、日が暮れぬうちにそろそろ出発したほうがいいですよ」

「ああ。そうだな。そろそろ出発しよう」

そう言って空を見るともう日は暮れかけて茜色に染まっていた。

エイト一行はここから一番近い町であるトラペッタへと向かうことにした。

第2話 トラペッタ（前書き）

感想お待ちしています！

第2話　トラペッタ

北東に位置する大陸にある町、トラペッタ。

「ふむ、ここがトラペッタじゃ。わしの記憶が正しければここにわしらをこんな姿にした憎き性悪魔法使い、ドルマゲスのかつての師であった、マスター・ライラスという老人魔法使いが住んでいるはずじゃ。」

「おっさんのもとの姿なんて想像できないがすよ」

「かつてのイケメン国王がこんな姿に…」

「嘘をついちゃ、いけないがす」

「嘘なんかじゃないわい！　エイト、わしの家来としてなんか言うてやれ！」

急に振られた。

ここで冗談をいう気にもなれなかったので、本当のことを言っただけだ。

「今の姿と変わんないぜ」

「ほーら、しょせんこんなおっさんなんでげすね。想像がつくでがす」

「こらエイト！　お前まで何を言う…」

「それにしてもおっさんと兄貴は王と家来のような感じがしないで
げす」

そんなことは当然だった。

いろいろな事情がありエイトはトロデに小さいころから面倒を見て
もらっている。

もはや家族のようなものであった。

もちろん、トロデのひとり娘でもある、ミーティア姫とも仲が良か
った。

俺はこれには何にも答えず、この町で何をすればよいのか尋ねた。

「そうじゃのう…。とりあえずエイト、さっそくじゃがライラス
なる人物を探し出して来てくれぬか？」

「わかった。この町は立派だがそう広くもない。すぐに見つか
るだろう。いくぞ！ヤンガス」

「了解でげす！」

とりあえず俺たちは町を見渡す。

円形の広場の中央には小さな噴水がある。

町は2層の構造になっており、中央から階段を上ると上の層へ行け
るようになってる。

「兄貴、さっきから思うのですがあの煙の立っている場所は何で
がすかね」

俺もそれは思っていた。

町に入る時から、煙が高く高く立っていた。

「誰かがバーベキューでもしているんだろう」

「そうですがねえ。何かひっかかるでげす」

「まずはライラスという人物を探そう」

俺たちはまず酒場へと入った。

ここなら人が集まり何か知っている人がいるかもしれない。

「あら？ 見かけない顔ね。この町の人じゃないでしょ。」

酒場へ入ってすぐ、バニーガールに声をかけられた。

「ええ。ちょっと人探しを。」

「へえ、そうなんだあ。あなたの連れてるねずみみたいな動物はあなたのペットなの？ うふふ。かわいいわね」

「ど、どうも。トーポっていうんです」

「へー、トーポっていうんだ？ トーポちゃん、よろしくね」

トーポは俺が物心ついたときからそばにいた。

とにかく賢くて、どこへいっても俺のもとへ帰ってくる。

ちなみに、チーズが大好物で、

魔法のチーズを食べると炎や氷をはいて、戦闘の役にも立つ。

と、そこで酒場のカウンターのほうから話し声が聞こえてきた。

「ルイネロさん、もうやめにしないかい？」

その方向をみると、マスターとカウンターの客が話をしていた。

「悪いけどこっちも商売なんだ。あんたの当たらない占いなんかいつぱいの酒代にもなりやしないよ」

「なんだと！？ わしの占いが当たらないだと！？ あほうかお前は！？ もともと占いなど当たらなくて当たり前なのだ。もし、もしもだ……。先日の火事を占いで予見し止めたでしょう。しかしそれがなんになる？ そのことが次の災いのタネになるかもしれないのだ。」

先日の火事…

あの煙が上がつてるところだろうか。

確かに火事のように見えたが。

「ルイネロさん、言ってる意味が分かんないよ……。もし火事が分かっていたら少なくともマスター・ライラスを救えたんじゃないのかい？」

ライラスを救えた？

つまりあの火事はライラスの家だったということか？

「…ライラスか……。あの老人とはよくケンカしたものだ。まさか死ぬとはな…」

「兄貴、こいつライラスのことをよく知っているがす！」

ということでルイネロに事情を聞こうとしたその時、ドアが勢いよ

く開け放たれ、ひとり青年が入ってきて叫んだ。

「た、大変だ！ 怪物が！ 町の中に怪物が入り込んで！」

「なんだと？」

「とにかく来てくれないか！ もう、大騒ぎで！」

「いくぞ！ ヤンガス！」

俺たちはすぐに店を飛び出し、騒ぎの起きている下へと駆け下りていった。

「まさか町中で魔物が出るなんて思ってもいなかったでげす。」

「しかしすごい騒ぎだな。 って、っ！！」

とんでもないものを見た。

「ありやいったい！？ こりや大変だ！ 兄貴、走るでげすよ！！！」

町中が騒いでいた理由、それは

「おっさん、こりやなんでげすか！」

そう。全員がトロデを見ていた。

広場の中央に、緑の魔物と美しい白馬がいた。

「うわ！ こつちを見たぞ！」

「キヤー！　なんておぞましい顔なの！」

トロデがキョロキョロするたびにそこらじゅうから悲鳴が上がる。

「出てゆけ！　化け物はこの町から出てゆけ！！」

しまいには、石が投げ込まれる。

数発がトロデに命中し、うずくまったとき、

美しい馬の鳴き声とともに、白馬がトロデの前に出た。

トロデを守ったのだった。

動けないでいた俺たちもここでようやく前へと出て、町の門へとトロデとミーンティアとともに向かった。

「化け物は出てゆけ！」

最後まで罵声を浴びた。

くくくく

「やれやれ、ひどいめにあったわい。　いったいわしを誰だと思っているのじゃ！　人を見た目だけで判断するとは情けないのう。人は外見ではないというのに……。」

じたばたするトロデ。

「まったく、その通りだ！！　うんうん」

「ときにエイト。　マスター・ライラスじゃが見つけることが出来たのかの？」

俺は事情を説明した。

「なんと！！　すでに亡くなっていたじゃと！？　むむむむむ……」

肩を落とすトロデ。

「ふむ、亡くなってしまったものは仕方がないの……。　もともとわれらが追っているのはわしと姫をこのような姿に変えた憎きドルマゲスじゃ！　マスター・ライラスに聞けば何かわかるやもしれぬとそう思ったのじゃが……。　やはりドルマゲスの行方はわしらが自力で探すしかないようじゃな。　では、行くとするか。　ライラスがない今、こんな町に長居は無用じゃ！」

「そうだな。　じゃあ、次の場所へ出発だ！」

「よし、久々に武器をふるうことができるです！」

俺たちが出発しようとした時、

「お待ちください……」

後ろから弱い声で声をかけられた。

「実はあなた方をお願いがあってこうして駆けつけてきました。」

そちらを見ると、俺やミーティアと同じくらいの年齢の可愛い女の子が立っていた。

「お嬢さん、あんたこのわしを見てもこわくないのかね？」

「夢を見ました…。人でも魔物でもない者がやがてこの町を訪れる…。その者がそなたの願いを叶えるであろう…。と。」

「人でも魔物でもない？ それはわしのことか？」

となりではヤンガスが爆笑している。

「あつ！ ごめんなさいっ」

「まあ、よいわ。見れば我が娘ミーティアと同じような年頃。そなたわしらのことを夢に見たと申すか？ よくわからぬ話じゃ」

「あつ申し遅れました。私は占い師ルイネ口の娘、ユリマです。どうか私の家に来てくれませんか？ 詳しい話はそこで。町の奥の井戸の前が私の家です。待ってますからきつと来てくださいね」

そう言つて駆け足で戻っていくユリマ。

「なんでげすかいあの娘っ子は？ 井戸の前が私の家だったって…。」

「えらい！！」

「おお！ いきなりなんでげすかおっさん！」

急にトロデが感激しだした。

「このわしを見て怖がらぬとはさすが我が娘ミーティアと同じ年頃じゃっ！ ここはひとつあの娘のためにひと肌脱いでやろうでは

ないか！」

「そうだな。夢で見たっていうのも本当のようだし、何かわかるかもしれない」

「よし！エイト！ 町の奥の井戸の家じゃったな。 行つて話を聞いてまいれ。」

「おっさんはどうするんだ？」

「ん？ わしか？ わしと姫はここで待つておるよ。 また騒がれるじゃろうしな」

「そうか。 わかつたよ」

俺たちはユリマの家へと向かった。

第2話 トラペッタ（後書き）

続きます。

感想、アドバイスお願いします。

第3話 戦闘（前書き）

感想、アドバイスお待ちしてます！

第3話 戦闘

「兄貴ー！ ちょっと行く前にモンスターを倒しに行きたいがす」

この世界では、草原やダンジョン内で、無数のモンスターが現れる。それらを倒すことで経験値を得たり、お金^{ゴールド}Gを得たりすることができる。

「そうだな。 ちょっとだけモンスターでも倒しに行くか。 最近戦ってなかったから飽き飽きしていたところだ。」

この辺の出現モンスターにそう強いモンスターはいない。しかし、稀に強いモンスターもいるため、注意が必要である。

しばらく草原を歩いていると、早速モンスターを発見した。

「兄貴！ ありやリザートファッツでがす！」

「ほう。 いきなり強力モンスターか」

「しかも三体いるでがすよ！ 大丈夫でがすかね？」

正直普通の戦士では厳しい。

普通に一体が相手でもやられるような敵だ。

しかし、ヤングスにその心配はないので気楽に戦ってもらうことにした。

「よし。 じゃあ俺がその二体をやるからお前はそいつを頼む」

「了解がす！」

）
）
）
）

ヤンガスは勢いよく飛び出した。

背中からいつもの棍棒を引き抜いたが、少し考えてからやめ、袋から大きなハンマーを取り出した。

リザードファッツは、ドラゴン系のモンスターで、青い体に長い尻尾、凶暴な性格を持つ強力なモンスターだ。

魔法も使えるため、厄介な敵だった。

「キシヤアアアー」

ヤンガスの勢いとパワーのある打撃を頭に叩き込まれ、一瞬敵はひるんだが、それでも立て直し大きな尻尾をヤンガスめがけて飛んでもない速さで振る。

「うおっ つて、っ!!」

後ろに瞬間的にはね衝撃を和らげたのだが、HPバーを見ると、3分の1ほど削られていた。

「クソ！ こりゃ並大抵の強さじゃねえ!!」

しかし、ヤンガスは怜瀬に次の攻撃を繰り出す。

「デビルクラッシュ!!!」

ヤンガスはハンマーを地面に叩き込む。

それと同時に地面に紫の不気味な紋章が現れ、敵へと伸びていく。そして敵の前でルーンが一文字一文字現れるや否や、リザードファツツに悪魔の打撃が叩き込まれた。

「シャアアアーーーー」

ヤンガスが戦闘スキルで習得した特技の一つ、デビルクラッシュが炸裂した。

ドラゴンの咆哮が上がる中、ヤンガスは次の攻撃に身構えていた。今の一撃で倒れるとは思えない。

ヤンガスは体の中で魔力を練った。

案の定、リザードファツツはあの攻撃に耐え、かなりのダメージを受けながらも立っていた。

しかし、ヤンガスは余裕の表情をしていた。

「これで終わりだぜ！ ビックバン！！！」

ヤンガスは魔力を一気に放出し、相手へ超爆発を浴びせた。

くくくく

ヤンガスが飛び出していくのを見たエイトは、敵に目を向けた。

リザードファツツが二体。

これならいけるな。

とりあえず剣を抜く。

剣を抜くと同時に体中が熱くなり、意識がどんどん集中していく。リザードファツツが動き出した。

エイトは目にも止まらぬ速さで敵の前へ出現した。

あまりにも速いために突然現れたように見えたのだ。

しかし、リザードファツツも体に似合わぬ反応速度で体をさばき、

エイトの必殺の剣劇をかわす。

「ちっ！ 無駄にすばしっこい奴め」

エイトは即座に呪文を唱え、敵に炎を浴びせる。

普通、呪文を唱えるには短い詠唱が必要だが、エイトにその必要はない。

魔法名をつぶやくだけですぐに魔法を使えることができる。

リザードファッツは予想外の攻撃に反応できなかったため、炎をモロにくらった。

「シャアアアアアー！！！！」

ドラゴンの叫びとともに一体のリザードファッツが倒れる。

もう一体は余裕を醸し出すかのように見物していた。

「おい、そのやつ！ 今の見て怖気づいたならさっさとどこかに行きな！！ 今のよりもっとすごいを見せてやるぜ！」

リザードファッツは人間の言葉が理解できるほど知能が高い。しかしそれでも敵は動かなかった。

「くそっ！ 無駄に冷静な奴め！！」

エイトは一瞬で加速、リザードファッツに向けて剣を滑らせる。

「っ！？」

しかし、真っ二つにせんという剣劇は虚しく空を切ったのみだった。こんな反応速度の良いモンスターなんていたのだろうか。

下手すりやボス級のモンスターだぞ！！

「…後ろだ！！」

戦士の勘からか、敵の位置が大体分かる。

後ろを見ずに、体を回転させながら斬撃を叩き込む。

「キシヤアアアー」

何とか当てることに成功したものの、傷は浅い。

すぐに尻尾の不意打ちが来た。

エイトはすぐに後ろにはねのけ、次の攻撃に身構えたが、攻撃が来ない。

何が起こったのかとっていると、すぐに分かった。

「……呪文か！！」

リザードファッツは炎系の呪文を得意とする。

しかも、MPが^{マジックパワー}高いために、かなり強力な攻撃呪文である。

しかしエイトは動じなかった。

リザードファッツの前に紋章が現れ、そこから大量の炎が渦となつてなだれ込んでくる。

しかし、その大量の炎はエイトへと達しようとしたその時、まるでエイトの前に壁があるかのごとくその壁へと吸い込まれていった。当然、壁などなく、何もない空間へと完全に炎が吸い込まれたのみだが、リザードファッツはかなり驚いたようだった。

「この世界で俺のこの能力は^{マジックキャンセル}ちよつと反則過ぎるよなあ……」

エイトは即座に魔力を開放、雷系上級魔法、ライデインを唱える。

無数の稲妻が敵へと迸り、激しい光とともに視界が真っ白になり、一瞬で敵を炭化する。

「ふう……。かなり手こずったなあ。」

ヤンガスのほうを見ると、大胆にも敵へ大爆発をくらわせているところだった。

）　　）　　）　　）

「兄貴！！ 今回の敵はかなり手ごわかったがす」

手ごわいどころかボス級だった。

もしかしたらヤンガスでも危なかったかもしれない。

「ああ。 でもいい経験値がもらえたんじゃないか？」

「そうだがすねえ。 久々に戦えたことだし町に戻ってあの嬢ちゃんの話聞いてあげましようや」

おっと、そうだった。

目的を忘れかけていた。

「そうだな。 よし、戻るぞ」

俺らはユリマの家へと今度こそ向かうことにした。

第3話 戦闘（後書き）

今回は、もうそろそろ戦闘を入れたほうがいいんじゃないのか？と思いついて少し閑話ですw

次回からストーリーも進めていく予定です。

感想など、どんな些細なことでもいいのでお願いします！！

登場人物確認

「エイト」

本作の主人公。

とあるお城で傭兵をしていた若者。

持ち前の剣技と多彩な呪文を持つ。

呪文詠唱なしで呪文を唱えたり、魔法を無効化したり、さまざまな特殊能力を持つ。

「ヤングス」

見た目凶悪な元山賊の中年。

なぜかエイトのことを「兄貴」と呼ぶ。このことについてはもうそろそろ説明を入れるつもりです。

実は非常に人情に厚く、頼りになる人物。

「トロデ」

エイトのいた城の王。

ドルマゲスに呪いをかけられ、現在の魔物のような姿になってしまった。

娘のミーティアを溺愛している。

「ミーティア」

エイトたちと一緒に旅をしている美しい白馬。

トロデが自らの娘といっていることから、彼女もまた呪いをかけられたと思われる。

もとの姿はかなりの美少女らしい。

登場人物確認（後書き）

これからもよろしく願いします！

第4話 ユリマの願い

草原で戦闘をして、ユリマの家へ向かう途中にはすでに夜中になっていた。

「あの嬢ちゃんは起きているんでげすかね？」

「どうだろうか。まあ、とりあえず行ってみよう」

ユリマの家へ入ると、入ってすぐの机にうずくまるようにユリマは寝ていた。

その机の上には、ガラスでできた大きな水晶玉が乗っていた。

しかし、何か神秘的な水晶とは言えないような気がする。

ただのガラス玉のように見える。

ここで、ユリマが俺たちの訪問に気付いた。

「あ！ 本当に来てくれたんですね！ なのに私ったらうたた寝なんかしててごめんなさい。 実は頼みというのはこの水晶玉のことなんです」

水晶玉？

よく話をつかめてない俺に気づき、ユリマは詳しく話し始めた。

「かつて私の父ルイネロはものすごく高名な占い師でした。 どんな探し物もたずね人もルイネロにはわからぬことはない…。 しかし、ある日を境にその占いは全く当たらなくなってしまったのです。 多分それはこの水晶がただのガラス玉に…」

キィィ…

ドアの開く音がして、ユリマの話が中断された。
ユリマは驚き、かたまってしまっている。

「何を話しているんだ、ユリマ！」

どうやら怒っているようだ。

「その水晶玉に触るなどあれば何度でも…」

と、ここでもうやく俺たちの存在にルイネロは気づいた。

「ん？ あんたは確か…… 酒場で会った人だな？ …… まあ、ともかくだ！ わしは別に困っていない。 娘に何を頼まれたかは知らんが余計なお世話だぞ！」

それだけ言い放ち、階段を上っていく。

「さて、わしはもう寝る。 ユリマ！ 客人には早々にお引き取り願うんだぞ」

ルイネロが階段を登りきったところで、ようやくユリマが口を開いた。

「ごめんなさい。 あんな父で…。 でも！ あんなこと言っても占いが当たらなくなつて一番悩んでいるのは父本人だと思います。」

ユリマは一度うつむき、何かを決心したように顔を上げる。

「だからお願いです！ 父本来の力が発揮できるほどの大きな水晶を見つけて来てくれませんか？」

この子は父思いのいい子だなあと考えた。

自分は父も母も知らない。

でも、この子の力になってあげたいと、素直にそう思った。

ヤンガスのほうをちらっと見ると、予想通り笑ってうなずいてくれた。

「よし。 わかった！ 力になるよ」

「え！ 引き受けてくれるんですか！ やっぱり夢のお告げ通りだわ！」

つくづくすごい夢だなあと思う。

しかし、ここまではつきり夢と一致してしまうのならしょうがない。

「その夢のお告げによると、町の南の大きな滝の下の洞窟に水晶が眠っているそうです。 こんなことが分かるなんて私はやっぱり偉大なるルイネロの娘ですよねっ」

そう言うてにつこり笑うユリマ。

正直かなり可愛くて、ドキッとした。

「よし、早速行くぞ、ヤンガス！」

「ラジャー！」

こつして俺らは滝の洞窟へと向かうことになった。

第4話 ユリマの願い（後書き）

短すぎましたかね w w

感想などお待ちします

第5話 滝の洞窟（前書き）

感想、意見、批判、アドバイス、お願いします

第5話 滝の洞窟

俺たちは町に2つあるうちの1つ、南側の巨大な門を通り抜けてすぐのところでトロデに今回の事情を説明した。

トロデも理解してくれたようで、俺たちは滝の洞窟へと歩を進めた。

「それにしても占いが当たらないのにそんな理由があつたでがすねえ」

そんな理由とは、ルイネロの持つ現在の水晶玉のことだ。

実はあの水晶はただのガラス玉であるという。

なぜガラス玉に変わってしまったのか不明だが、それはこの仕事を終わらせてから考えよう。

しばらく草原を南に向かって歩くと、モンスターに遭遇することなく洞窟へと到着した。

壮大な草原に滝があり、その水の流れのあいだの壁に穴が開いており、そこが洞窟となっているようだった。

「ふむ。 滝の洞窟とはこのことじゃな。 よし、エイト！ あの親想いの娘のために頑張ってこい！」

「おう！ よし、行くか！ ヤンガス」

「了解です！」

俺らは洞窟内へとはいつて行った。

）　　）　　）　　）

「あー。　邪魔くさい！」

俺は行く手に現れるモンスターに惜しみなく魔法を使い、前へとすすんでいた。

それにしてもここはモンスターが多い。

しかし、それほどレベルも高くないので、炎系の魔法で周りを焼き尽くしながら歩いて行った。

「兄貴も派手にやりますねー」

目の前に現れたモグラのようなモンスターを自分のハンマーでめんどくさそうに、モグラたたきのように叩きながら言うヤンガス。

「なんだ！　このモンスターの数は！　イライラしてしょうがない！」

そう言つて俺は雷系^{いかずち}上級魔法、ライデインを放った。

あたりが一瞬にして真っ白になり、周りがフェードアウトしたところには目の前にモンスターはいなかった。

その代わり、炭化して倒れるモンスターが一面に広がった。

「兄貴はすごいがすね。　改めてそう思わされたがす」

「改まるな。　最初からそう思つとけ」

「えへへ、そんなことわかつてるでげすよ」

そんなことを話しながら奥のほうへ歩いていると、水の流れる音が

大きくなった。

どうやら洞窟の最深部に近づいているようだった。

さらに少し歩いて行くと、最深部へとたどり着いた。

滝壺が洞窟内にあり、天井から大量の水が滝となり流れ落ちて来ていた。

あたりには水がたまり、いくつかの小さな滝もあり、幻想的な空間となっていた。

そんな幻想的な大きな滝の途中に、綺麗な水晶が浮いているのを見つけた。

「ん？ これはなんだ？ もしかしてこれがその水晶なのか？」

俺は迷わずその水晶に手を伸ばす。

すると、滝壺から何かが飛び出してきた。

「ふあっふあっふあ！ 驚いたじゃろう？ わしはこの滝の主ザバ

ンじゃ。 わしは長い間待つておった。 お前で何人目になるかのう

……。 今度こそ今度こそと思いながらこれ10数年……………。

長い歳月であつたな。 さて前置きはこれぐらいにしておこう。

いいか、正直に答えるのだぞ。 おまえがこの水晶の持ち主か？」

ここで違うといつてもどうにもなりそうになかったのでエイトは自分のものだ、と答えた。

この魔物を見ると、赤い体に、腹は白く、とがった爪を持っている。見た目は大きな魚+小さなドラゴンといったところだろうか。額には十字の傷があつた。

しかしなぜ水晶の持ち主を探していたのだろう。

怒っているのは確かであつた。

「そうか。 この持ち主はおまえであつたか。 いやというほど懲

らしめてくれるわ!!」

「兄貴、こいつ戦う気満々なんですが…」

「まあいい。取り返す方法がそれしかないのならやるのみだ。」

こうして水晶をめぐった戦いが幕を開けた。

第5話 滝の洞窟（後書き）

すいません。

文章が下手すぎるw

まあ、これからもよろしくです

第6話 淹の主（前書き）

感想、お待ちしております！

お気に入り登録とかしてくれるとうれしいです！！W

第6話 淹の主

俺は一瞬でトップスピードに乗り、ザバンとの間合いを詰める。

この速さにザバンは驚いたが、それでも冷静に体をさばき俺の剣撃をよける。

さすがはボスモンスターだ。

しかし、すぐさま魔力を解き放ち、閃光系最上級呪文、ベギラゴンを唱える。

「ベギラゴン！」

その瞬間、エイトの周りから大量の炎があふれ出し、巨大な壁となりザバンへと襲いかかる。

「呪文詠唱なしだ！？」

ザバンはよけることもできずにその炎に飲みつくされる。

しかし、ザバンは平然とそこにいた、はずだった。

「ふおっふおっふお、わしの得意呪文である炎はわたしにはきかんわい！」

確かに得意呪文はダメージが少ない。

しかし全く効かないというのはあり得ないため、少なからずダメージは与えたはずだ。

炎の壁が消えかかり、平然というザバンの姿が見えようとしたその時、

「うおおりやー」

後ろから詰め寄ったヤンガスが会心の打撃をザバンに与える。

「つなに!？」

ザバンは頭部にヤンガスの打撃を受けた。

「この… よくもわしの頭に！ 二度も!!」

すると、ザバンは手を下から上へと振り上げた。
瞬間、呪いの霧がエイトとヤンガスに向かう。

「うおっ!？ なんだっ!」

ヤンガスはその霧を浴び、呪いに掛かってしまった。

しかし、エイトは、目の前に壁があるかのようにその壁に呪いははじかれ、平然と立っていた。

「なんだと？ わしの呪いが効かない!? まさか!お前!」

「うるさい! お前には関係ない話だ!」

エイトは思い切り剣を上から振り落とす。
その剣は見事にザバンの体へと命中した。
が、その硬いうろこに浅い傷をつけたのみだった。

「その能力は呪いのみに効果を発揮すると聞いたが」

「さあな。 実際に試してみたらどうだ」

確かに俺の能力は当初、呪いのみにしか効果を及ぼさなかった。しかし、戦いを重ねると同時に、普通の魔法すらもはじき返す、魔法無効化になっていった。

この能力はなぜあるのか、それは俺にもわからない。しかし、この能力のおかげで俺はミーティアを救うための旅をすることができる。

ザバンは詠唱を始めた。

詠唱といってもほんの数秒間で完成する。

「ベギラゴン!!」

ザバンが放った魔法は先ほど俺が使ったものと同じものだった。巨大な炎の壁が俺のほうへ向かってくる。

普通の人間なら死を前に恐怖するところだろう。

しかし俺は怖くない。

いつものように魔法無効化が発動し、すべての炎を弾き飛ばす。マジックキャンセル

「ほう。やはり効かぬか。 なら!」

ザバンは腕を振り上げ、鋭い爪を振りおろしてきた。

あまりの速さにエイトすらもあせったが、ギリギリで交わした。しかし、腕を少しかすったため、肩の下あたりから出血した。

その一瞬隙にもう一度爪を振りおろしてくる。

これはまずいかも、とエイトが思った時、

「忘れられちゃ困るでがす!!!」

グッドタイミングだった。

爪で切り刻まれる瞬間、呪いから解き放たれたヤングスの痛恨の一撃が決まった。

「遅いぞ！ ヤングス」

「えええ、すいませんでがす。 ちょっとばかり体がだるくて」

呪いを浴びると体が動けなくなるらしい。

数分すれば戻るが、体力が徐々に削られていく。

「そんなことより兄貴、さっさと終わらせてくだせえ。 もう疲れただげす」

「よし。 わかった。」

「何を言っておる？ お前ごときにこのわしがやられるわけなどあるまい」

もうそろそろナメられるのも腹が立つ。

「ヤングス、頼む」

「了解！」

そういうと、ヤングスはザバンへと向かっていく。

よし。

ザバンへと向かっていったヤングスを見ると、エイトは呪文詠唱を始めた。

使う呪文はエイトの十八番である「ライデイン」だ。

この呪文は雷系^{いかすち}上級呪文であり、詠唱にも数分要する。
普段は詠唱なしに唱えているが、今回は威力増大のために詠唱することにした。

数分後、詠唱が完成した。

ヤンガスも何とか持ちこたえたようだ。

「よし、いいぞ。 ヤンガス」

「兄貴！ 行けえええー！ー！」

「ライドイン！」

直後、無数の雷撃がザバンへと落ちた。

今までの呪文など比にならない数の電撃がザバンを襲う。

これはさすがに効いただろう。

エイトもやりすぎたか、と思うほどだった。

俺はジャンプし、視界が戻ったザバンの頭に峰打ちを叩き込んだ。

第7話 過去（前書き）

更新遅れましたw
w

第7話 過去

「痛 痛 痛……。額の古傷が痛むわい！ それもこれもお前のせいじゃぞ！」

こいつの過去に何があったかなんて俺にはわかるわけがない。

「おい、お魚野郎、何の事だかまったくわからないぞ！」

「なに？ わからないだと？ ……さてはお主……。この水晶の持ち主ではないな？」

「当たり前だろ阿呆！！ この最強戦士がひきこもって占いなんてするわけないだろうが！」

「わしの偉大なる呪い攻撃をひとつも受け付けぬその体質……」

ふと考え込むザバン。

そして何かを思いついたように顔を上げた。

「そういえば、水の流れに乗ってこんな噂を耳にしたぞ」

くくくく

トロデーン城。

大陸内では大きさと豪華さで知れ渡っているお城。

いつものように過ごしていた城の人たち。

エイトも傭兵だったために城内にいた。

しかし、一瞬にして何者かの魔法によって城全体がイバラに包まれた。

ただ一人の生き残りを残して。

その生き残りはなぜか呪いがきかなかったという…

その一人はなぜか御者を乗せた馬車を連れて旅に出たという。

）
）
）
）

「そうか、それはおぬしであつたか。」

「そんなもんだっていいだろ。さっさと水晶をよこせ！」

「わかった。おぬしにくれてやろう。このわしに勝つたのだからな。」

以外と素直に渡してくれた。

「それから、最後に一つ。もしおまえがこの水晶の本当の持ち主に会ったら伝えてくれ！」

最後の頼みというやつか。

まあ、聞いてやってもいいだろう。

「なんだ？」

「むやみやたらと滝つぼに物を投げ捨てるでないとな」

・・・・・・。

「っわははは！！！！」

笑いがこみあげてきた。

隣ではヤンガスも腹を抱えて笑っている。

どうやらこの魚みたいなやつはルイネロが捨てた水晶が額に当たって痛かったようだ。

「笑うな！」

「うるさい。もう一度ビリビリ感電させてやろつか？」

「うう・・・・」

どうやらやはりあの電撃は効いたらしい。

「まあ、よい。さらばじゃ」

そう言ってザバンは淹つばへと帰って行った。

エイトとヤンガスは洞窟脱出呪文、リレミトを唱えてトラペッタへと水晶を持ち帰った。

第7話 過去（後書き）

感想お待ちしております

第8話 親子（前書き）

感想、評価お願いします。

第8話 親子

「そろそろ戻る頃と思っていたぞ」

水晶、というより単なるガラス玉の前に座ったルイネロが言う。
今はもう夜になり、町は眠りにつこうとしていた。

「どうやらユリマに頼まれたものを持って帰ってきたようだな。
くさってもこのルイネロ、このくらいわかるわい」

「ああ。 あんたの娘に頼まれた。 そしてその頼みを聞いてやつ
たんだ。 あんたの娘はあんたのことを考えて俺たちに頼んだんだ。
なぜそれをわかってあげない？」

「うるさい。 おぬしらには関係ないことだ。 どうせその水晶も
また滝つぼに捨てるのみ……」

「あーあ、またあのお魚さんが怒っちまうでげすよ」

鼻をほじりながらめんどくさそうに言うヤングス。

「お魚さん？わけがわからんぞ！」

と、ここでルイネロが立ち上がった。

「いいか、どうしてわしが水晶を捨てたのか、それはユリマも知らないことだ。 ましてやおぬしらなどに……」

ルイネロはエイトの方に手を伸ばし、

「その水晶をよこせ！ 今度は二度と拾って来れぬよう粉々に砕いてくれる！」

「やめてっ！ お父さん！」

寝たと思っていたユリマが急に部屋のドアを開けた。

目の周りが赤いことから、彼女は泣いていたのかもしれない。

「私、知ってるから。ずっと前から、私…… なぜ水晶を捨てたのかも……」

「ユリマ…… お前…… ならば自分の本当の親のことを？」

本当の親？

エイトには意味がわからなかった。

しかし、家族の話なんだろう。

なにがあるかはわからない。

俺だって両親を知らないのだから。

「うん……。でも私はお父さんのせいで両親が死んだなんて思っ
てないよ」

ユリマはもう泣いていた。

両親のことを思い出したのだろうか。

それともルイネロの辛さを考えたのだろうか。

「どうしてだ、ユリマ？ そこまで知っていながらどうしてそう思う？ このわしを恨んでも……」

「うっん、お父さんはただ占いをしただけだもん。私は知らないけどお父さんの占いってとってもすごかったんでしょ。だからどこに逃げたのかわからなかった私の両親の居場所もあっさりと当ててしまったんだよね。」

「……………。あのころわしに占えないものなどないと思っていました。わしの名は世界中に鳴り響き…。わしは有頂天だったよ。占えることはかたっぱしから占った。」

ルイネ口は低い声でつぶけた。

「自分のことばかり考えて頼んでくる連中が善人か悪人かそんなことすら考えなかった。」

「もういいの。もう、いいのよ。」

ユリマはもう完全に泣いていた。涙が溢れるように流れ、自分の感情を抑えきれないでいた。

「だってお父さんは一人ぼっちになった赤ちゃんの私を育ててくれたじゃない。」

ヤンガスが限界を迎えた。

エイトの隣でヤンガスは親子と一緒に涙を流している。

「私、見てみたいな。」

ルイネ口は顔をあげる。娘が何を言いたいのか。

「高名だったころの自信に満ちたお父さんを。　どんなことでも占えたお父さんを。」

「ユリマ……」

その後の会話はどんどん明るくなっていった。

ルイネロとユリマは本当の親子のように笑いながら話していた。

俺とヤンガスはもう邪魔だと思い帰ろうとしたが、ルイネロに泊って行ってくれと頼まれたために、そうさせてもらうことにした。

正直疲れがたまり寝たかったところだ。

トロデには悪いが、ベッドで寝させてもらった。

第9話 占い師とその娘との別れ

俺はヤングスのいびきで目を覚ました。
体のあちこちが痛い。

先日の戦闘で久々に少し本気になったためだろう。
それにしてもヤングスのいびきはうるさい。

ギネス申請をしたらどうだろうか。

そんなことを考えながら時計をふと見ると、針は1時を指していた。

「もうこんな時間かよ・・・」

俺はベッドから体を起こし、かけていた布団をきれいにしてから階段を下りて行った。

「やっと起きてきたか。 もう昼だぞ。 こんな時間まで寝込むとは相当に疲れていたであろう。」

例の水晶の前に座ったルイネロがこちらを向いて言った。

いつものガラス玉はきれいな水晶に変わっていた。

見た感じはあまり分らないが、確かに本物の水晶は何かが違う気がした。

「ああ。 正直かなり疲れがきていてな。 悪いな。 こんな時間まで寝させてもらって。」

「泊って行ってくれと言ったのはわしだ。 気にすることはない」

そしてルイネロはゆっくり目をつむった。

「こつやって真剣に占うのは何年ぶりかのう……。これもおぬし
らのおかげだ。」

そうか。

俺たちを泊めたのはこれからのことについて占ってくれるためだったのか。

ありがたいことである。

「こ、これは！ どうしたことかつ！？」

いきなり目を見開くルイネロ。

俺もルイネロの言葉に集中してしまう。

「見えるぞ！ 見えるぞ！ 道化師のような男が南の関所を破って
行ったらしい！」

道化師……

トロデの追っている『ドルマゲス』も確か道化師のような格好をしてるとかしてないとか……

「むむ、むむむむむむ！ ヤツこそがマスター・ライラスを手に
掛けた犯人じゃ」

マスター・ライラス。

かつてのドルマゲスの師であり、最近殺されたという。

ドルマゲスの手掛かりを得るためにこの街を訪れたが、すでにライラスはなくなっていた。

「こいつは！ 間違いない。その昔ライラスの弟子であつた……」

ライラスは何かを思い出したように言った。

「ド！ ドルマゲス！！！」

「なんだって！！！！？」

急にその名前を聞いてヤンガスが跳び起き、階段を目にもとまらぬ速さで飛び降りてきた。

階段が壊れてしまうのではないかと思うほどの乱暴さで降りてきて、

「兄貴！ ドルマゲスっていや、兄貴とトロデのおっさんが追っていた性悪魔法使いの名前じゃ！？」

「ああ。 そうだ。 きつとその道化師の格好をした男がドルマゲスだろう」

「兄貴、どうするでげすか？」

もちろん答えはひとつしかない。

「南に向かおう。 とりあえずこの街を出てトロデに事情を話して南へ出発だ」

「南へ行くとリーザス村という小さな村がある。 そこへ向かうとよいだろう。 それと、街を出る前にユリマに会ってくれ。 あいつはもうすでにお前さんに…… っとまあ、挨拶くらいはしてやつてくれ」

正直意味はわからなかったが、とりあえず了承して俺たちはルイネ口、ユリマの家を出た。

家を出てすぐ、ユリマに会った。

「もう…、行ってしまうんですね……」

「ああ。世話になったな」

「いえ、本当にありがとうございました…… この街に残るって
いうことはないんですね…？」

「ああ。これから長い旅が続くだろう。もうこの街に戻って
くるとはないかもしれない」

「そうですね… 変なことを聞いてごめんなさい……」

もうユリマは泣きかけていた。
なんでこんなに悲しい顔をしているんだろう。

「それじゃあ、俺らはもう出発する」

「はい。…あのっ！ またこの街に来ることが会ったら必ず会
いに来て下さいね!!」

俺はこの言葉に片手をあげて歩いて行った。
ユリマは泣いていた。

この約束は必ず守ろう。
こうして俺たちは南に向かって出発した。

くくくく

ユリマは最後のエイトとの話の途中、泣きたくてしようがなかった。
とにかく悲しい。

別れが悲しい。

自分のために、関係もない自分のためにここまでしてくれたエイト。
できることなら一緒に暮らしていきたかった。
でもそれはできない。

エイトが背中を向けて歩き始めた。

片手をあげて去っていくエイトはまぶしかった。

約束、守ってくださいね……。

さようなら、私の初めての……。

二人の別れをオレンジ色の夕日が暖かく照らしていた。

第9話 占い師とその娘との別れ（後書き）

ユリマがエイトに恋????

しかし、しばらく、いや、もうユリマの出番はありません。

本当は出したいんだけどなあ

第10話 南の関所（前書き）

こんにちわ！

ここまで読んでくれているみなさん、本当にありがとうございます！
これからもがんばっていきます

第10話 南の関所

空がオレンジ色に染まり、トラペッタの石の外壁を赤く染めている夕日を背にして、俺たちはトラペッタから離れた。ヤンガスはなぜか少し暗い顔をしていた。

「どうしたんだヤンガス？」

「？ アツシ、何かおかしいですが？」

「いや、なんか暗いなあって。 お前みたいなおっさんが暗い顔したって俺はどうでもいいんだがな」

「兄貴、そりゃひどいですが」

「悪い悪い。 なんでもないんじゃないんだが」

ヤンガスはこの人はやっぱり優しい人だな、と心の中で思った。言ってることはひどいが人のことを心配できる。ただ、鈍すぎるころがあるような…とは感じているが。

「兄貴、あの嬢ちゃんとの別れはちょっとあっけなさすぎたんじゃないですか？」

「ん？ なんでだ？ 最後の別れは言っただろ」

「いや、なんていうかきつとあのお嬢ちゃんは兄貴のことが……」

「俺のことが？」

「お〜い！ エイト〜！」

と、ここでトロデが向こうから走ってきた。

ヤンガスは続きを言おうか迷ってやめた。

エイトを困らせるような事をする必要もない。

「で、どうじゃった？ あの娘さんの願いはかなったのか？ ん？
ん？ どうじゃったのじゃ？」

ずいぶんとしつこく聞いてくるなと思いつつもエイトは説明した。
ちゃんとユリマの願いがかなったこと。

ルイネロが占いを再び始めたこと。

ライラスを殺めたのがドルマゲスだったこと。

「なんじゃと？ ライラスを手につけたのがわしらの追うドルマゲ
スだったじゃと！？」

本気で驚いていた。

あまりの声の大きさに、壱へ帰ろうとしていたカラスたちが一斉に
飛び立った。

「あヤツめ…… かつての自分の師匠になんという……！！」

「ああ。 そしてドルマゲスは南へ向かったらしい。 これはルイ
ネロの占いだから間違いないだろう。」

「そうか。 ならばすぐにヤツの後を追うのじゃー！」

こうして南へ向かって出発した。

）
）
）
）

俺は南へ向かって歩いている途中、考え事をしていた。

ミーティアのこと。

俺はトロデを元の姿にすること、ということもそうだが、ミーティアの姿を戻すことの方が強く思っている。

俺はとなりを歩いている白馬を見た。

なんとも美しいその姿に見たものは必ず釘づけになる。

しかし、元の姿は人間。

今はものも喋れずただひたすら馬車を曳いている。

どんな気持ちなんだろうか。

トロデはいつものように持ち前の好奇心を発揮して先を歩いている。

俺はミーティアに話しかけた。

「大変だな、ミーティア」

白馬は嘶いて答えて見せた。

「俺がすぐに戻してやるから、待ってるよ」

ミーティアはこっちを見ていた。

何も反応はしなかったが、うれしそうにしている、気がする。

もう一度ミーティアと話したい。

俺が城で一人にいる時も、ミーティアは俺の相手をしてくれた。

俺は小さい時、赤ちゃんの時からあの城にいるために、ミーティア

と仲が良かった。

年が同じというのもあり、俺らは仲良く話し相手としてやってきた。呪いが掛かる前までは。

ドルマゲスが来る前までは。

ミーティアが戻るのはいつだろう。

ずっとそんなことを考えていたが、夜が来たために俺らは野宿することにした。

しばらくミーティアのことで頭がいっぱいだったが、眠りに落ちて行った。

第10話 南の関所（後書き）

続きまーす！

第11話 リーザス村

俺は小鳥のさえずる音で目を覚ました。

目を覚ます理由がヤンガスのいびきではないということはきっとヤンガスは起きているのだろう。

ミーティアのことを考えながら寝たためか、目覚めがいい。

俺は木々に囲まれている草原を見渡した。

トラペツタから道なりに歩いてくると、この場所へ着く。

リーザス村という村がこの先にあり、ドルマゲスが向かった先はたぶんここである。

「兄貴……！ 起きたでがすかー？」

ヤンガスが向こうから走ってきた。

「ああ。 誰かさんのいびきがなかったせいで寝過ごしたよ」

「それはひどいですが！ ちょっといいことじゃないでがすか」

「はは。 そうかもな」

ここでトロデが来た。

ドルマゲスのことを考えていたのか、あまり寝付けなかったようだ。まあ、体中が緑だからわからないが。

「エイトも起きたことだし、リーザス村へ向かうぞい」

「おう！」

リーザス村はここから近いはずだ。
思った通り、俺たちは少し歩くと村を見つけた。

「ここがリーザス村でがすね」

「ずいぶんと平和そうなむらじやな。魔物に困ったことはないの
ではないか？」

トロデの言った通り、ここはずいぶんのどかだった。
まわりを木々に囲まれ、中央には小川が流れている、田舎の村、リ
ーザス村。
地元の名士を慕う人々がのんびりと暮している、ほんとにのどかな
村だ。

俺たちはリーザス村へ足を踏み入れた。
するとすぐに小さな子供が駆け寄ってきた。

「おい、お前たち！ 何者だ！？」

急にこんなことを言われた。

「あ？ 何者って、旅の…」

「えーい、サーベルと兄さんのかたきだ！」

そういつて10歳くらいの子供二人が勝負をしかけてきた。
しかし、見るからに弱そうだ。
なんてったって、鍋をかぶり、ほうきで武装したガキが強いわけが
ない。

俺たちはどうしようか途方に暮れた、が、すぐに助けが来た。

「こら！ お前たち、何してるんだい」

見ると、お年寄りの女性だった。

「この早とちりが！ ただの旅人さんだろ！」

「いってー！」

女性が二人の頭を軽く叩いた。

すると二人はぶつぶつ言いながら去って行った。

「すいませんねえ。 あの子達悪い子じゃないんですが」

「いや、全然気にしてないけど……」

「最近村に不幸があつたもんで……。 おっと。 まあ詳しい話は村の者にでも聞くといいじやろう。 この村はいい村じやよ。 どうぞゆつくりしていただくさね。」

不幸……

いったい何があつたのだろう。

まあ、そのうちわかることだろう。

「兄貴、とりあえず聞き込みでもしましょうや。」

「そうだな」

こうして俺たちは村の人々に聞き込みをすることにした。

第12話 ひそかに進行する事態（前書き）

感想、評価お願いします

第12話 ひそかに進行する事態

リーザス村は本当に小さな村だ。

一軒一軒家を回ったって、30分ほどで全世帯を回ることができるだろう。

小さな家が並ぶ中、ひとつだけ大きな家があった。

その家は村の奥の方にあり、周りとは違うことがすぐにわかる。

「あの立派なお屋敷に住んでいる人がさしずめこの村を平和に取り仕切っている名士ってヤツなんでげしょうなあ」

「ああ。あの家に行ってみるか」

今日もいつものようにトロデは村に入ってこない。

理由はもちろん先日的事件のせいだ。

魔物のような生き物が町や村に入ってきたとなると、人々はそりや大騒ぎするだろう。

「と、その前にメシを食わないか。 腹が減った。 確か馬車の中に食いもんがあったはずだ」

「賛成でげす！ アッシも腹が減っていたところでげす」

ちょうど時刻も昼、朝に何も食っていない俺たちは腹ごしらえすることにした。

）
）
）
）

ミーティアとトロデはエイトたちが村に入ってから少し離れたところで休憩していた。

「ワシらはどうやらドルマゲスに今一步で追い付けずにいるらしいのう…」

ミーティアはいなないて反応する。

「そうじゃ。この辺は緑が多いからのう。食べれる草でも取りにちよつとそつちへ行ってくるぞい。姫はここで待っておれ」

こう言つてトロデは森の中へはいつて行つた。

ミーティアはひとりになってから腰を下ろした。

自分は戻れるのだろうか…

エイトが必ず戻してやると言ってくれた。

エイトの言葉はもちろん信じる。

今までもそうだ。

疑つたことなど一度もない。

ひよつとしたら自分はエイトのことが…

ずっと一人で過ごしてきたミーティアはそんな感情を抱いたことがなかったために、自分の感情がわからず戸惑っていた。

今は信じるしかない。

馬になったって、エイトはそばにいてくれる。
その優しさがうれしい。

ただ、その優しさが少し自分の心の痛みになる時もある。

そんなことをずっと一人でミーティアは考えていた。

そんな中、近くの草がカサカサと動いていることに気付いた。

（なんだろう……）

すると急に草むらから魔物を従えた男の集団が現れ、ミーティアに大きな袋をかぶせ、草の奥へと連れて行った。

「へへっ。 成功しやしたな」

「ああ。 2000Gくらいにはなるんじゃないか」

「それじゃ、今晚はごちそうですなあ」

卑猥な笑みを浮かべた男たちがそんなことを話している。

この男たちはミーティアを売り飛ばそうとしている。

ミーティアは一瞬でそれを悟った。

「それにしてもきれいなお馬さんだなあ。 いったいどこにこんな馬がいるんだ？」

どうやらこの男はミーティアに話しかけているようだ。
しかしミーティアはそっちを見もしない。

「生意気な馬だな。きれいな馬ならもつと上品にしているよ!」

「兄貴、お馬さんに話しかけっただって返事があるわけじゃないですか」

「ははっ。そうだな」

しかしミーティアはすべて言葉がわかる。

それは人間だから当然のことだが、今は馬の姿である。

「それじゃあ、すぐ売り飛ばしに行きますか」

「そうだな。儲かりまっか!」

ミーティアはここでようやく事の重大さに気付いた。

このまま連れて行かれてしまっってはまずい。

下手すればもうエイトのもとに帰れなくなるかもしれないのだ。

(エイトっ!)

ミーティアは心の中で何度もその名前を叫んだ。

「なんかこの白馬さんがちょっと暴れてきてますよ」

「嫌がつてるってわけか。まあこのまま連れて行けばこっちのもんだがな」

「でも飼い主に見つかったらどうしますか?」

「なーに、こっちには魔物を6匹従えてるんだ。とんだ最強戦士

じゃない限り大丈夫だよ。 みんなレベルの高い最強獣だしな」

「考えてみたらそうですね」

（最強獣が6匹……）

かなり手ごわい。

なんでこんな強い魔物をこの盗賊たちが従えられるのかが不明だが、これでは近くの人々じゃ助けてくれないだろう。

ミーティアは絶望を覚え始めた。

エイトは村へ行つてまだ戻ってこないだろう。

自分はこのまま売られてしまうのだろうか。

（っ！ エイトっ！！）

「おう！ どうした、ミーティア姫」

第13話 助け

ミーティアは無意識にエイトの名前を心の中で叫んでいた。

（っ！ エイトっ！！）

「おう！ どうした、ミーティア姫」

（エイト？ なぜ？ 村に行ったはずじゃ…）

「ひい、ふう、みい… ありゃあ、強そうな魔物が6匹もいるですよ」

大きな袋に包まれたミーティアの後ろにでっかな魔物が付いていた。ヤンガスは数え終わると大きな棍棒を用意した。

「待つてろよ、ミーティア！」

エイトは飛び出した。

相手の魔物はすべてイバラでできたドラゴンだ。火炎系最強呪文のメラゾーマを使いこなし、体のイバラで攻撃してくる。

この世界でもなかなか見ない最強モンスターだ。

「ベギラゴン！」

エイトが叫ぶや否や、巨大な炎の壁が敵の3体に襲いかかる。

1匹は空を飛びかわしたが、残りの2体にはモロにヒットした。ドラゴンも甲高い悲鳴を上げながら倒れた。しかしこの程度の攻撃ではまだ戦闘は続けられる。すぐに飛び襲いかかってきた。

今は3体ずつヤンガスと手分けして戦っているため、残りの3体はヤンガスが何とかしてくれるだろう。

エイトは剣を持つとドラゴンに切りかかった。

目にもとまらぬ速さで加速、エイトは3歩ほどでトップスピードに乗っていた。

その速さのまま先ほど逃げた一匹に切りかかる。

エイトが剣を振り上げると、剣に炎がまとった。

そのままエイトは剣を振りおろし、ドラゴンのイバラを切り裂く。

「キシヤアアア……！」

悲鳴とともに体の一部が切断されるドラゴン。

しかしすぐに呪文を放ってきた。

人間が呪文を唱えるには、しっかり詠唱しなければならないが、魔物はその必要がない。

エイトの頭上に巨大な火の玉が現れた。

（メラゾーマか。）

エイトはすぐにその呪文が何か分かった。

この呪文には相当の魔力を要し、しかし効果は絶大だ。

その辺の魔物では一発でジ・エンドだろう。

しかしエイトはいつもの通りあの能力がある。

火の玉がエイトめがけて振り落ちてきた。

ヤンガスは戦いのさなか、その炎の巨大さに目を見開いた。
あんな強大な魔力がこの魔物の中にあるなんて…

しかし、その巨大な炎もエイトのまわりに吸い込まれる。
なんとも圧巻だった。

数秒間、魔力をエイトの魔法無効化が発動し、大量の炎を無効化した。
マジックキャンセル

そしてすぐに攻撃に転じ、一体を切り裂いた。

そしてすぐさま雷系上級呪文、エイトの十八番であるライデインで
いかすち
とどめをさす。

あたりがフラッシュバック、そしてイバラドラゴンは炭化して倒れ
伏した。

「あーりゃ、ヤンガスのやつ苦戦してるなあ。。」

第14話 一撃必殺（前書き）

更新送れました！

お気に入り登録してくださった方々、ありがとうございます

第14話 一撃必殺

「ヤンガスー、大丈夫か？」

ヤンガスはイバドラゴン3体に苦戦していた。

何しろ強力魔獣であるドラゴンが3体もいるのだから、しょうがないことだった。

並大抵の戦士では体に傷をつけるのがやっとならう。

「あ、兄貴、すみません、手伝ってくれとうれしいですが」

いつものように変な口調でしゃべるヤンガス。

ヤンガスは体中がかすり傷だらけだった。

少し焦げているところを見ると、火炎系最強呪文、メラゾーマを何回か食らったのだろう。

「わかった。今日はもう寝るだけだから魔力を開放するぞ」

これはエイトが「ちよつと呪文を強めに唱える」という合図だ。

魔力を開放といっても、エイトが魔力を全開放すると、地球1個くらいなら軽く吹き飛ぶだろう。

エイトの命がどうなるかはわからないが。

そもそも魔力の容量に差がありすぎるのだ。
キャパシティ

この世の中に公平さなどない。

ただし、努力によってそれは左右される。

「お願いします、兄貴」

「わかった。さがってる」

エイトは自分の魔力を指先に集中させた。
完全に目を閉じている。

イバラドラゴンはこれを見て一斉に襲いかかってきた。
しかし、エイトの魔力によるオーラが強くて近づけない。
ビビって近づけないのではない。

魔力のオーラによって物理的にその範囲内に入れないのだ。
ドラゴンはすぐに呪文を唱えてきた。

巨大な火の玉がエイトの頭上に出来上がる。
そしてその威力は増していき、頂点へと行ったときに一気に降下してくる。

それでも、エイトの魔力オーラによってほとんどかき消された。
少量のこった炎はエイトの能力によって吸収される。

そこでドラゴンたちは3体同時にメラゾーマを唱えてきた。
今度はエイトやヤングスの近くまでに炎の玉が出来上がる。
エイトは魔力の精製が終わると、腰から細身で長い剣を取り出した。
そして、魔力を一気にその剣へと流しこむ。
ドラゴンの唱えたメラゾーマも完成していた。
空を真っ赤に染める超巨大な炎の玉……というより渦がエイトへと迫ってくる。

そしてエイトを包み込みまわりの草木を焼きつくす。
何も残らなかった。

草、木、動物、すべてが焼きつくされた。
ただ、ひとつ、ひとりのみを残して。

エイトのまわりだけはきれいな緑が残っていた。
マジックキャンセル
魔法無効化が発動、自分のまわりの魔力をすべて吸収した。

「この世界でこの能力は反則だよなあ……」

いつものセリフを残し、エイトの鋭い眼がドラゴンを捕まえる。
そして剣を居合切りの要領で横なぎにふった。

剣から無数、いや、無限の電撃が相手へと向かう。
ライデインなど比にならない。
もはや電撃などではなかった。
電気の壁、今度こそ何も残らなかった。

「ひ、ひ~~~~~!!」

「命だけは~~~~!!」

ミーティアを誘拐した男たちをエイトは睨んだ。

第15話 心の声

例の男たちは一目散に逃げて行った。

ジグザグに走っているところを見ると先ほどのギガスラッシュを食らわないようにしているのだろう。

まあ、そうしたところで意味はないのだが。

「兄貴、逃がしていいんですか？」

ヤンガスが不思議そうに聞いてきた。

「ああ。俺は倒したくてしょうがないくらい怒っているがミーテ
イアが殺してほしいとは思っていないだろう」

ヤンガスはつくづく優しい男だと思った。

きっとこの馬姫さんは殺してほしいとは思っていないのだろう。

「それにしても村の中でいきなり兄貴が外へ出るなんていったから
驚いたですよ」

エイトはリーザス村で聞き込みをしていたときにいきなり「ミーテ
イアが危ない」といつて村から飛び出したのである。

ヤンガスは正直焦った。

というか意味がわからなかったのだが、この有能な兄貴について行
くと言った通りミーティア姫が危険にさらされていた。

「勘だよ、勘」

そうはいったものの、エイトはミーティアの心のを聞いた気がした。

そして向かったときにミーティアの叫びを確かに聞いた。あり得ないことだが、確かに聞いたのだ。

理由はわからなかったが、ミーティアを近くに感じる気がしてうれしかった。

エイトはミーティアを袋から出してやった。

「怖い思いさせて悪いな、ミーティア」

ミーティアは目をつむった。

エイトはミーティアの毛並みをそろえてやる。

「それよりあのおっさんが悪いんだろ」

トロデの姿が見当たらない。

「おーい、今の爆発音は何だ？ 巨大地震か？」

向こうから緑のおっさんが走ってきた。

おっさんというより魔物だ。

人々が恐れるのも無理はない。

「おいおっさん、いったいなにしてたんだよ」

エイトはトロデに問いかける。

トロデはその迫力に押され少し顔がこわばっていた。

「なにつて、少し山菜取りに……」

「その間にミーティアが誘拐されたんだよ、誘拐！」

「な、ナニイイ~~~~~イ!!」

大げさに、いや確かに大ごとなのだがわざとらしく驚くトロデ。

「ワシの姫を誘拐しようなんて100年早いわ！」

「俺がいなかったらとつくにどつかにいつてるっつの！」

なんていうことを言うおっさんだ。

「すまない、姫。　わしが離れてしまったから」

そして俺の事はシカトか。

ミーティアはトロデに近づきその身を寄せた。

「おお、姫は優しいな。　じゃが、本当にすまなかった」

と、一件落着ということになった。

「だがこれからもこういうことはあるかもしれない。　なんつったってこんな綺麗な馬はなかないからなあ」

と、少し不安になるエイトたちだったが、すぐ切り替えてリーザス村に戻ることにした。

あたりは暗くなり始め、今日はもう休むことにした。

第16話 アルバート家の屋敷（前書き）

更新速度上げていきます！

第16話 アルバート家の屋敷

ミーティア誘拐事件の翌日、エイトたちはリーザス村の小さな宿屋で目覚めた。

「んあゝゝ、意外とゆっくり休めましたね、兄貴」

「ああ。このおんぼろベットでも寝れたよ」

宿屋は古くさくて中はボロボロ、しかし、疲れがたまっていたこともありぐっすりと眠れた。

「よし、じゃあドルマゲスの情報集めでもするか！」

「ラジャー！」

二人は勢いよく宿屋を飛び出す。

勢い余りすぎて宿泊代を払わず出そうになったが、なんとか泊り逃げは避けた。

「この村は小さいでげすからすぐおさらばになりそうだがすな」

「ああ。さっさと終わらせよう。あの大きな家にいつちまおうぜ」

エイトの視線の先にはこの村ではずいぶんと立派な家だった。家というか屋敷のこの建物は、このリーザス地方の名家であるアルバート家で、この屋敷には女主人とその娘が住んでいるらしい。

「それにしても兄貴、なにか村全体の空気が重くないですか？
あのおばちゃんも不幸があつたとかなんとかって…」

「ああ。きつと誰かが死んだんだろう。村の住民がやたらと黒い服を着ている」

「そう言われてみればそうでげすなあ…もしかしたらあのお屋敷に関係あるかもしれないですよ。それにドルマゲスがかかわっている可能性だって高いと思うでがす」

お、ヤングス珍しくまともなことを言うなあ。

そんなことを考えてしまったエイトだが、ヤングスの話はもっともだ。

そうしてエイトたちは屋敷の中へとはいつて行った。

第16話 アルバート家の屋敷（後書き）

今回はちょっと短かったですかね；

キリがいいのでこの辺にしておきますw

第17話 失踪

この地方の名家でアルバート家に、ゼシカという娘がいる。近日の不幸とはゼシカの兄であるサーベルトという人物の死であった。

俺たちは屋敷へと入った。

入るとすぐに2階へと昇る階段があり、全体が吹き抜けとなっている。

階段は右と左の2方向にわかれていて、豪華な家だった。

階段のそばには槍を持った兵士が一人立っていて、身動き一つしない。

階段を上るとすぐに、小さな子供が二人、ドアの前に立っていた。そちらを見ていると声をかけられた。

「おいお前、ここは通せないぞ。 誰にも会いたくないから誰も部屋に入れるなっていうゼシカ姉ちゃんの命令だからな」

ガキにナメられた。

「悪いがその中に人はいない」

俺ははつきりと言ってやった。

「なんだと？ そんなわけはない！ ゼシカ姉ちゃんが言ったんだ」

「本当だ。俺は人の気配くらいならわかる。でも全く気配を感じない。 確かめたらどうだ？」

子供は驚いたというか、単純に怒っていた。

「ならいなかったらどうする？」

子供みたいなことを聞いてくる。

俺はポケットから通貨であるGゴールドを取りだし見せてやる。

「うお！」

子供たちでは見たことがないだろう。

そもそもゼシカの本当の兄弟ではないこの二人がこの村で硬貨（しかも金貨）など見る機会もないだろう。

「「本当だな？」」

二人は声を合わせていう。

「ああ。 本当だ。 今これをやろう。 中を確認してくれるだけでいい」

この中に次の情報があるのは間違いなかった。
サーベルトの死は確実に関係しているだろう。

「よし。 見てくるから、少し待ってろ」

気の強そうな方の子供が恐る恐るドアを開けた。
そして中を見るなり驚いて勢いよくそのドアを開けた。
お陰で隣にいた子供はそのドアに顔面を強打した。

「イテっ！！！」

「おい、ゼシカ姉ちゃん本当にいないぞ！……あ！ 手紙だ！」
どうやら置き手紙があるようだ。

「おい！ その手紙を持ってきてくれ」

「お、おう わかった」

その手紙にはこう書いてあった。

『誰がこの手紙を読んでいるのかわからないけど、もし私以外の誰かが読んでいるのなら……。』

この手紙は遺書だと思ってください。

きっと今ごろ私はこの世にいないでしょう。

私は東の塔に行きます。

サーベルト兄さんのカタキを討つまで村には戻りません。

お母さん、家訓を破っちゃってごめんなさい。

ただ家訓よりもっと大事なことがあると思うの。

私は自分の信じた道を行います。

こんな娘で本当にごめんなさい。』

「あわわわ。 これはやばいぞ。 ゼシカ姉ちゃんの字だ」

焦っている子供。

ちなみに名前はポルクというらしい。

気の弱そうなのがマルクだ。

「東の塔か。行くしかないな」

「でもあそこは村人にしか開けられない扉が……」

「なに？ そんなもん魔法でぶち飛ばしてやるぜ」

開けられない扉なんぞ力づくで……と考えたがやめた。

「ならお前がついてこい」

第18話 東の塔

俺たちは村の東にある塔へ向かっていた。

「なんで俺がついてかなきやいけないんだ」

ポルクが文句を言う。

「そうか、金が必要なら帰っていいぞ。それにお前がいなかったらその扉を魔法で吹っ飛ばしてやる」

この言葉でポルクは黙り込んだ。

リーザス村のまわりは林があった。

山に囲まれていて、少し盆地のような地形だ。

道もあるが、それは人々が歩いたところの草がないだけで、自然がいつぱいだった。

「村人にしか開けられない扉ってどういうことだよ」

俺はポルクに問う。

「それだけ村にとって大事な塔ってことだ」

俺たちは東の塔へと到着した。

塔は思った以上に高いものだった。

入口は巨大な扉があり、人3人は縦に入れそうだった。

「？ 普通の扉じゃないですか」

そう言つてヤンガスは扉を押した。
確かに見た感じは普通のドアだ。
真ん中からきれいに開くと思つた扉がびくともしない。
ヤンガスは扉を引いた。

「押してダメなら引くでがす！」

しかしびくともしない。

「鍵をかけてるでがすか！ せこいでげすよ！ 村の秘密つて、しよぼすぎるじゃないでがすか」

「ちげーよ、とげとげのおっさん、」

ポルクがばかにしたように言う。

「こつやるんだよ！」

そういうと、ポルクは下から扉を上へ引き上げた。
まるでシャッターが開くように扉が上へと上がっていく。
俺たちは口を開けてみていた。

（（これ、必要あるか？））

二人して同じことを考えていた。
ポルクは自慢げに胸を張っている。

「こんなことしなくても鍵でいーじゃねーか」

「し、知らない！　むらのひみつだからな！　ぜったいだれにもいうなよ」

「わかったわかった。　もういいぞ、これやるからもう帰れ」

俺は金貨10枚、1000Gゴールドを手渡す。
ポルクは恍惚の表情を浮かべている。

「お、おう。　んじゃ、またな」

うれしそうに走っていくポルク。

「そっいえば、この扉どうやって閉めるんだ？」

後姿を見ながらこんなことを考えるエイトであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3099/>

ドラゴンクエスト？ 空と海と大地と呪われし姫君

2010年10月8日14時36分発行